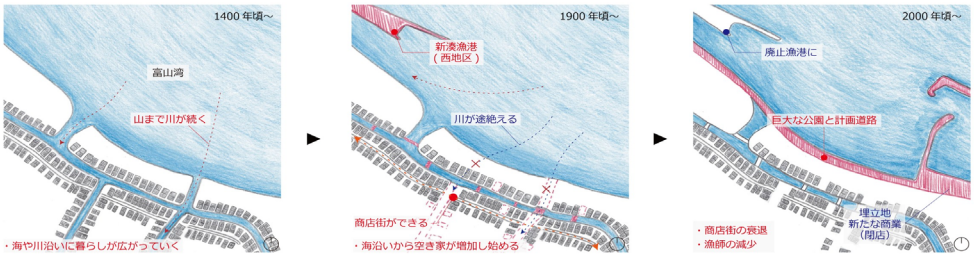
学生卒業設計制作NCF空間ディスプレイアワード受賞作品

受賞年	2023年	
受賞タイトル	**奨励賞**	
区　分	Ⅳ．都市ディスプレイデザイン	
フリガナ	タナダ　ユウスケ	
制作者名	棚田　悠介	
フリガナ	トウキョウデンキダイガク・ミライカガクブ・ケンチクガッカ	
卒業時の大学 学部・学科	東京電機大学・未来科学部・建築学科	
フリガナ	ヒノマサシ	職名
推薦者名	日野雅司	准教授
フリガナ	ジダイヲツナグ600mノ「キョウ」テキケンチク-オビジョウセイカツケンヲモツシンミナトノアラタナインフラケイカク-	
作品名	時代を繋ぐ600mの「共」的建築-帯状生活圏をもつ新湊の新たなインフラ計画-	
概　要	時が移りゆく中で、環境と人間がより豊かに関わりあう公共の場を考えたいと思いました。 敷地はかつて漁師の町として栄えていた富山県射水市新湊。 建築によって共同体を可視化し海岸に沿った帯状の公園敷地を建築化することで海沿いに様々な日常・非日常活動を発生させつつそれと直行する海岸と町をつなぐ新たな細長い「共」空間を再整備します。それらの交差点は新たなコミュニティの場へと再生し、新たな町の骨格を作っていきます。 	

制作者名	棚田　悠介
作品名	時代を繋ぐ600mの「共」的建築-帯状生活圏をもつ新湊の新たなインフラ計画-

【コンセプト解説】

新湊における時代の変遷



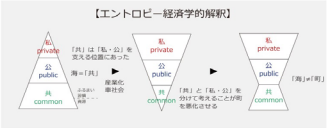
新湊の現状

10 年前の漁師の人口は 345 人であり現在 230 人へと減少。町の人口も減少、新しく建てられた商業施設もすぐに閉店。空き家も増加し、新湊の住宅形式である長屋住宅も近代の一般住宅に建て替えられている。自分はこの事実を、半年この町で過ごし知る。漁師町としての象徴性を無くし、何ら他の地方都市と変わらない風景としての地方都市化になってしまう懸念を感じた。

町の衰退が促進する主な要因

公園と計画道路は西と東を繋ぐ利点はあるが、町と海の関係性を物理的に分断していること、利用している人がいないこと、この公園側から空き家が増え始め衰退が加速している事実がある。しかし、**町のエッジである為、町全体の終点であり町全体と関係を持てること、海と町を繋げることができる場所**である為、好立地な環境であることは間違いない。こうした**町の時間軸や場所性、誰でも利用できる公園を設計することで町を変えることができる可能性を多く秘めており設計の手がかり**になると考える。

近代の公共空間に準えて



エントロピー経済学という視点から現代の公共の場について語る。ここでは、近代の公共の場が一般的に“「私」と「公」を分断し、その間に「共」がある”ことに対しては異なる。モノを生産すると廃棄物が生まれる。その廃棄物をどう解消していくかという視点で経済を考える仕組み。「共」は「私」と「公」という資源を支える存在であり、それらを枯渇させずに利用する規範として位置づけられる。

・新湊の領域性

海に沿った帯状の構造が町を形成している漁師町

長い年月をかけ、町が海に沿って帯状の構造を形成している。つまり、帯構造は新湊の領域を示すものでもあり町の象徴性を帯びている。こうした象徴性を持った帯をデザインすることはかつての町の豊かさを取り戻すことができるのではないか。

・閉じた建築の解体

閉塞的な漁師の作業場

生活感が見えない家

近代化・産業化により作られた漁師の作業場や住居が町に対して閉鎖的である。新湊の文脈を踏まえると海を軸に個々が町と密接に繋がることでかつての海（＝共）空間を獲得することができる。環境帯が個々の居場所に沿い、関係性を与えることで町と接点を持つような建築へと変えていく。

・狭い路地や道への展開

川に向かう路地

生活感ある道

祝祭時の道風景

新湊を調査すると町の帯構造を横断する路地や、道を私有地として使い倒したり祝祭時でも活用している風景を発見する。路地や道は個々が外部空間との関わりを持つことができる居場所である。

・大小の空地空間の発見

公園のような空き地

小さなカラフルの空き地

新湊では長屋住宅であった大きな空き地空間や、カラフルな壁に囲まれた小さな空き地を発見することができる。このような空間も町の一部として繋ぐことで今あるの新湊の町並みを維持しながら、新しい空間を展開し空き地の活用を促す。

海と生活を近づける「環境体」

町の路地や道、住まいや空き地など町の環境を生かしながら、建築＝「環境体」によって町と人、人と人を結んでいく。

600m ある「環境体」によって、海を軸に広がっていた新湊の生活風景を彷彿するような象徴性を持ち

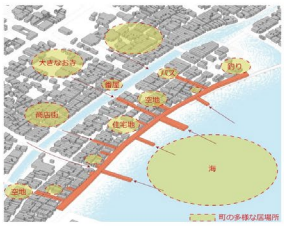
町の読み解きから多様なプログラムを、既存の公園の場所に与える。

そうすることで周辺環境と「環境体」での関係性が生まれ町を支え、町の中心となるような場所をつくっていく。

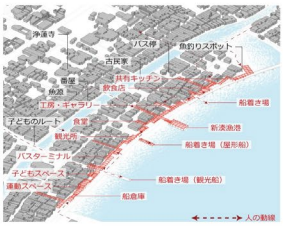
住宅や漁師の作業場、空き地や路地の関係性を考慮しながら、生活の中に「環境体」を介入することで、閉じられた建物の領域を拡張させ

生活の中に新たな交差点を与え、海側へ集まる居場所として展開することで新たな町構造を町に与える建築となる。

海と町が再び繋がる為の町のエッジ、またインフラ更新期に生まれた巨大な公園を対象とし、町の象徴性をもつ帯構造を活かし立体化する



離れてしまった町の個々の居場所を繋ぐように町や海に建築を展開する



周辺環境を巻き込みながら町を支えるように様々な機能を付加していくことで立体的で細長い「共」の場が生まれ、町の中心となるような場所をつくっていく